

科学と倫理

— J・デュウイの場合 —

亀 尾 利 夫

デュウイによれば、我々は、科学的研究が人間に与える信念、即ち事物の現実的な構造、及びその事物の過程に関する信念と、他方、自らの行為を統制する所の諸価値に関する信念とを保持して、この二通りの信念がどうすれば最も有効且つ有利に関係しうるか、という問題こそ、人生が提起するあらゆる問題の中で最も一般的であり、有意義な問題なのである（Q・一八、二五六等）。以下で我々は、この二通りの信念の交渉の可能なる事、その最も有効且つ有利な交渉はどのようなものであるのかの、デュウイの思索を整理、検討し、更にデュウイ哲学の根本前提に迫りたいと思う。

彼が科学という時、自然科学が考えられているのだが、自然科学の系統、或は自然科学的研究の行程を、彼は、次のように説明する。

科学的研究は、「我々の日常生活において経験される所の、環境をなしている諸事物から出発する。即ち我々が見たり、取扱ったり、用いたり、楽しんだり、又苦しんだりする事物、言い換えれば、通常の性質の世界から出発する

(Q・一〇三)」。その第一歩は、解決を必要とする問題の所在を確めることである。それは、与えられた事物の性質を変えることによってなされる。即ち、操作的な活動を通して、「直接に経験された諸対象を与件にまで還元する(Q・一二三)」のである。直接経験、乃至直接の対象は、混沌として曖昧であるが、これらは、問題の本質の所在を定める与件が示された時、或る操作的活動についての思惟を呼び起す。他方で別種な操作がなされる。それは、「今観察された素材を解釈し、更に新しい実験を始めることを示唆するのに、役立つような観念を既得の知識の中に探し尋ねることである(Q・一七三)」。

一例として医者が患者を診察する場合についてみれば、次のようにいえる。医者にとって直接的、根本的な経験の素材は、患者に呼ばれることによって準備される。患者は、諸範疇によって組織づけられる感覚与件といってもよい。医者は、聴診、打診等の活動をなし、脈搏、体温、等々を記録する。これは一定の操作的な活動である。そしてこの脈搏、体温等々が、病気の徴候を構成し、解釈さるべき直証 *evidenece* を提供する。言うまでもなく、これらの観察の結果は、観察しうることのすべてではなく、この病気の性質に関して推理するのに関係がある、と考えられる経験全体の中の若干の部分に過ぎない。又これらの諸結果は、それ自体で存在するものを意味するのではなく、その医者が駆使することが出来る限りの、医療の知識の下に組織された、一定の意味なのである。そして医者は、適当な判断をし、処法を決めるのに助けになりうる諸々の観念を、彼の全知識の中に探し求める。この際、感覚与件は、諸観念の選択を指導する記号であり、感覚与件一つの全体に結合する手段としての、解釈する為の素材 *interpreting material* は、直接に感性的には存在しない。それ故に、これは概念的な素材、或は観念化された *ideational* 素材と呼ばれる。そして、かかる素材によって、感覚与件は解釈され、彼の診断、そして処法が決定される。その際、この処法、処置を決定するのにあつかった観念は、予想的計画であり、本質的に仮説である。従って、この観念の妥当性は、

以後の経験を通して、言い換えれば、処法の結果によってテストされるのである（Q: 二一四、一三七、一六六、一七四—五）。先にも触れた所であるが、医者の観察、聴診等の諸結果は、それ自体で存在するものを意味するのでなく、医者の操作的といえる活動の結果えられた一定の意味である。それと同様、感覚与件を解釈する為の觀念も、医者の探究に先立って存在する、究極的、不変的な存在それ自体にかかわるものではない。この点で、感覚論的解釈も、合理論的解釈も共に拒けられるのである。

事物の性質は、我々の認識活動に先行し、独立にあるものではなく、一定の実験的操作によってえられるもの、即ち行為の結果なのである。科学は、当該事象の生起が依存する所の外在的な関係を探究し、明瞭にしようとする。従って、科学的探究の方法とは、或る変化を導き、誘い出し、その結果他のどのような変化が継続するかを観察する為の方法である。そして、一連の操作によって、これらの変化間の相関関係が、測定される時、知識の明確な対象が、構成されるのである（Q: 八四）。¹⁾ ところで、ブリッジマン Bridgman の次の見解が採用されることとなる（Bridgman: The Logic of Modern Physics, 1927, p.5. Q: 一一一）。「或る対象の長さを知る為には、我々は或る物理的操作を遂行しなければならぬ。それ故に、長さの概念が固定されるのは、長さを測定する操作が固定される時である。即ち長さの概念は、長さを決定する一連の操作を含み、それ以上の何物をも含まない。一般に、我々は、何らかの概念によって、一連の操作を意味するに外ならない。即ち概念は、それに対応する一連の操作と同義語である。」²⁾ こうして操作主義 operationalism の規定が採用されることとなる。

〔註〕 小論においてデューイ諸著の頁を示す場合、左のように略記することとする。

Q: 一八 = The Quest for Certainty, 1929, 1960, p.18.

A: = Problems of Men, 1946.

I = Logic, the Theory of Inquiry, 1938, 1951.

E = Experience and Nature, 1929, 1958.

(-) 猶、「観察しうる事実 observable fact (Q. 七八)」、「粗雑な、分析を経ない経験という素材、即ち「常識」という素材から出発する (Q. 一七三)」等の表現がなされる。又、直接の事柄は「事物 things」、「出来事 event」という、言葉で指示されるが、叙述したり、定義したりすることのできないもの (E. 第三章等)、とされる。

二

以上のように理解される科学の方法が教える所、即ち観念は、現に在るもの、又かつて在ったものの説明ではなくて、正に遂行されようとしている行動を説明し、指示する仮説的な道具である、という考え方を承認する時に、哲学は真正な観念論となる、とデュウイはいふ (Q. 一三八)。又「経験的な観念理論 an empirical theory of ideas (Q. 一一四)」の語によって、感覚論及び合理論と自らの論とを区別する。(H)

古い経験論は、感覚論的性格を持ち、感覚乃至感覚与件という限定条件の下に枠づけられてきた。即ち感覚乃至感覚与件は、観念が形成される素材であるといわれ、この素材と一致することによって、観念はテストされるといわれてきた。従って感覚的性質は先行する範型であった。数学的諸観念についても、その起源が、感覚的諸性質の中に求められた。然し、実験的になったデュウイの経験的な観念理論においては、勿論観念は経験的起源をもつとされているのだが、経験的起源とは、遂行された行為を意味し、外から押しつけられた感覚を受容することではない。感覚的性質は重要である。然し、志向的になされた行為の成果としてのみ意味がある。数学的諸観念も、操作的な諸活動に結びつけられる (Q. 二五五以下)。数学的な諸概念は、具体的な行為とは全く関わりのない操作、即ち象徴によっ

て、物理学的概念よりも更に抽象化作用を進める。その結果、数があらゆる性質上の差異を捨象するものとなる。数学的概念と物理学的概念との相違は、次の点にある。「砂糖の甘さという『観念』は、直接に経験される質とは別なものである味わうという可能的な操作活動の結果の一表示である(Q.二五九—一六)。」念の為につけ加えれば、ここで、直接に経験される質、というのは、「根源においては行為と素材、主観と客観の別なく、両方の要素が未分のまにある総体(E・八)」の意味である。他方、数学的な概念は、別な一つの、第二の意味における可能的な操作活動の表示であり、具体的実行から抽象された象徴的な操作活動の可能性にかかわるのである。一例をあげれば、数学的空間は、物理的空間と区別される一種の空間ではなくて、むしろ、空間的な諸性質を持つものに関して、観念的或は形式的に可能的な操作活動に与えられる名称である。このような象徴的な操作活動の可能性は、現実存在に関する実行の可能性ではない。然し論理的一貫性 *consistency* というのは、この可能性の十全な意味をとらえるものではない。「あらゆる展開は、それらが互に矛盾しない限り、又は一つの操作活動の言い換えが、具体的な矛盾を招かない限り、歓迎される(Q.一六〇)」、ということを意味する「非不両立性 *Non-incompatibility*」というのが適當であるとされる。

こうして、「真正な観念論」といわれる「実験的観念論」によれば、科学的研究はすべて、操作的活動即ち実践 *practice* を不可欠とするが故に、科学的認識と我々の行為、道德的行為との間は交渉可能とされる。更に、科学的判断はユニークにして、特殊、個性的なケースに適する所の、判断という一種の行為を自由にし、強める為になされるのであり(P.二一六—七)、実験的な科学においては、どのような実験をなすべきか、どのような装置を考案し、使用すべきか、どのような計算をなすべきか、どのような数学の部門を駆使すべきか、という何をなすべきかの問題が常に起るのであるから、科学的探求と実践の問題とは、論理的に同じだ、といわれる(Q.三七—八)。発生的な観点から

言うならば、人は生きる為にどのようにせねばならないかを知らうと試み、又彼が企てようとすることを見究める必要があったのである。そして彼の企て、行動の障礙となるもの、行動の手段及び結果等を構成する環境を探究することによってのみ、彼の企てんとしていたことを見究めることができた。行為の結果について、より大きな安全性をえたいと考え、何かを実現する手段として意味があったから、知りたいという願望が起ったのである。それ故に、認識と行為とは、人間生活の連続性の中で、連続している、といえる。又認識は生きる為の手段であつた、ともいえる。

然し、科学における普遍的なもの、或は所謂法則は何であるかを、論理的に考えてみよう。先にのべた所から、科学が経験的且つ実験的性格をもつことは、明らかである。このことは、科学的な陳述が具体的な経験にその起源をもつということの意味すると同時に、法則や普遍的なるものは、この具体的な経験への適用の関連において、テストされ、チェックされることを意味する。こうして普遍的なるものは、特殊、個性的な経験を促進する為の知性的な器具、道具の意味を持ち、一般的命題も、我々が一つの特殊から他の特殊へと移行してゆく橋としての中間的な位置を持つことになり、最初のものでも、最後のものでもなくなる(P.二二七—八、二二七、Q.二〇五—七)。言うまでもなく、法則、公式、定式等は、それ自体で存在する不変的、究極的な、先行的存在ではない。従つて、科学的に認識するというのは、個々の事象を、法則の事例に還元することではない。新しい基礎の上に考えられる法則は、観察しうる事件の確率(蓋然性)についての予言に関する定式であり、具体的な存在を有効に処理する方法である(Q.二〇七)。こうして、科学の方法と、技術において追求される方法との間には、論理的原則という点では、異なる所がない(Q.八四)、といわれる。

〔註〕(一)その他に觀念及び概念に関する「器具主義 instrumentalism (Q.一〇六、一三五、一四七、二〇五、等々)」、「実験的经验主義 (Q.一二二、一五六、二五八、二八六)」、「実験的觀念論 (Q.一六八)」等の規定が行われる。

科学的な探究は、何をなすべきかという実践の問題の探究と、論理的に同じであることが、論ぜられた。然し、從來、科学的判断と倫理的判断とは、論理的に同じでない、という主張が、種々なされてきた。それらの主張は、単純な定式として示しうる、とデュウイはいう(P.二二五—六)。即ち道德的、倫理的判断と、科学的事実判断との間にある、深淵のような論理的な距りに関する陳述は、次の二つの二律背反の命題に還元される。一つは、普遍 the universal と個物 the individual との分離、もう一つは、知性的なるもの the intellectual と実践的なもの the practical との分離である。これらは更に一つに還元される。科学的命題は、一般的な条件と関連し、一般的な状況及び一般的な関係については、完全にして客観的な命題が可能であるが、他方、倫理的判断は、個性的な行為に關係し、このような行為は、それ自体の本性によって、客観的命題を越えている、という命題である。科学的判断は普遍的であり、仮説的であるが故に、行為に關係することは不可能である、何故なら、倫理的判断は個性的であり、定言的であるが故に、ともいわれてきたのである。

デュウイによれば、このような定式化に対して、集約するならば、次の二つの反問を提起しうる。第一は、科学的判断が、それ自体の中に、又それ自体が原因で、普遍的性質をもつ内容にかかわるということは、真であるかという間である。第二は、道德的倫理的判断を知的技術によって規制する企ては、——その判断は、いうまでもなく、徹底的に個性化されたものであるが、——倫理的価値を破壊するものであるか、という間である。この二点を論ずることによって、次の三つの事が示される。第一に、科学的判断は、すべて倫理的判断の論理的性格を持っているということ、即ち科学的判断は、個性的なケースにかかわり、行為にかかわるということが示される。第二に、個性化された

倫理的判断が、一般的、客観的形式で言いあらわされる一般的命題を求めるものであるということが、そして最後に、倫理学に関する科学的提言がありうるならば、その場合の一般的、科学的命題の構造が沿ってゆかねばならない典型が、示される。

第一の科学的判断の性格、その論理の意味については、既に述べられた。然し、次のように整理することもできる（P・二二六—八）。

判断はどのようなものでも、その具体的現実においては、留意という一種の行為 an act of attention であり、関心或は目的に仕えて、習慣や衝動の傾向を展開することを含むものである。従って判断はすべて、留意する対象に関して選択すること、又対象を解釈する立脚点と様式とについて選択することを含んでいる。他方、科学における抽象的、一般的命題は、留意を個性化する判断或は行為が、必要であるということから展開してきたものであり、個性的判断を最も効果的になしうる為の器具 *instrumentalities* という意味で、一般的形式を装うのである。それ故、一般的命題は、使用されることによって、不断にチェックされる。こうして、科学の体系は、その論理的価値に関しては、絶対的に、実践的、道徳的関心に依存する。換言すれば、実践的関心を取去るとすると、科学の体系は、全く美的なものになってしまう。その内的調和と均衡によって、情緒的な反応は引起すであろうが、論理的な重要性、意味はないものになってしまう。従って、「科学に含まれる一般的な命題乃至普遍的なるものは、判断する人の習慣や衝動の傾向を媒介としてのみ効果をもちうるのである（P・二二八）」といわれうる。結論はこうである。「科学的探究の行為は、物理科学的探究であろうと、数学的探究であろうと、実践の様相なのである。換言すれば、科学者は、すべての他の事についての実行者 *practitioner* なのであり、不断に実践的判断をなしているのである。何をなすべきか、又はそれをなすのに、どのような方法を用いるべきかに関する決定をなしているのである（L・一六一）⁽¹⁾」

次に、倫理的判断を知的技术によつて規制することについて、その可能、意味、方向を検討せねばならない。

従来、道徳的判断は、単に、ある予め決定された目的自体を理解し、これを発現することであると考えられてきた。こういう考えによれば、問題的状态というものは、存在しないことになる。主観的に、道徳的に不安定な状態にあるか、又は無知といえる状態にある一人の人間がいるというだけである。そしてその際、彼の仕事は、予め定められた目的自体を、ただ単に知的に所有するようになることである（L・一六八）。然し、デュウイによれば、道徳的な判断とは、客観的な、具体的、現実的な状況にかかわるものである。詳言するならば、行為をなさんとする者が、自らを含めた、当面する苦境をなしている事実はどうのようなものであるか——自己と環境とを含めた客観的な、不安定な状況——を観察し、この苦境を解決し、安定した状況に造りかえるには、どんな操作が、どのような行動のコースが必要かを決定すること、そして目論見 *end-in-view* としての、行動のプランをたてることを意味する。従つて、善とは、現実に存在する状況の中で、必要とされる行動の種類に関して検討、評価さるべき具体的なものである（L・一六七—八）。

既に述べたように、すべての判断は、具体的現実においては、関心や目的に仕え、習慣や衝動の傾向を展開するという面をもっている。又、科学に含まれる一般の命題は、その論理的機能に関して、判断する人の習慣や衝動の傾向を媒介としてのみ、効果をもちうる。従つて、倫理的・道徳的判断におけると同様、すべての判断において、「判断する人の態度や性向に依存する場合がある（P・二三〇）」、ということになる。然し、判断は、どのような判断であろうとも、本来、判断する人の全性格の表現であろう。何故なら、あらゆる場合に、判断は一種の行為であり、又あらゆる行為なるものは、関心の表現の一種である。従つて、習慣の表現であり、性格全体の表現であるから。ここに至れば、判断をなすに際して、諸条件を客観的に確定する為には、判断する者は、自己自身を判断せねばならないことに

なる。何故なら、判断する者は、意識的に、判断という行為を規制するあらゆる条件を、一箇の対象として構成する必要があるからである（P・二三三）。

判断する者が、彼自身の態度という条件の下で、彼の眼前に現われる状況を解釈するのであるから、判断の内容は、判断する者の性向によって影響される。それ故に、性向の客観的分析が可能であれば、道徳的倫理的判断を規制する一般理論も可能となるであらう。こうして、心理学的分析が問題となる。心理学的分析は、直接的経験の中に埋没してしまふ性格を変形し、客観的、科学的事実とする道具なのである（P・二三七）。他方、道徳的判断における状況の側に目を転ずる時、同様に、問題の状況を構成している場面の諸事実についての十全な知識なしには道徳判断を合理的に規制することはできない。

判断する者が、判断された内容に与かる *participate* と同様に、判断された対象が、判断する者の決定に与かる（P・二四三）。そして、判断する者は対人的 *personal* なことから、判断の内容は究極的に対人的であるに違いない。従って、道徳的判断は、真に、人間間の関係を構成する社会的なるものにかかわるということになる。道徳的判断を引起す状況は、本来社会的状況なのである。こうして状況、環境に関する諸事実は、社会学的分析の方法によって知られるのであるとされる。「我々は、社会的状況を明らかにすることによって、我々自身の諸々の動機と、それらの結果を、客観的にすることによって、一般的な命題、換言すれば、諸条件の連結である経験的、客観的形式の陳述を作るのである（P・二四六、Q・第十章参照）。」

こうして、道徳は科学の諸結論に依存しなければならない（Q・二七四）、という意味も解明されたであらう。

〔註〕（一）同趣旨の言明として次のものをあげることができる。

「科学的な企てにおいても、例えば、『これらの事実を与件として、又実証として扱うのは、価値がある、この実験を

試み、又あの觀察を行うことは得策である、かくかくの仮説をたてること、この計算を実行することは得策である、」等の語には、価値評価 estimate の不断の継起が適用されている（Q. 二六二）。」

四

然し、心理学的、社会学的分析、更に物理学的、生物学的科学の諸知識が、道德的、倫理的判断を合理的に規制するに不可欠であるということは理解されても、猶、これらの科学乃至科学的分析は、何が目的であり、何が理想であるかを告げるのであろうか、という問が提起されるであらう。

デュウイは、「心理学的分析が、我々に何が目的であるか、とか或は、何が理想であるか、とかいうことを告げるとはいわない。然し、心理学的分析は、我々に、或る目的を形成すること、或る目的を受けいれるということが、何を意味するか、ということこそを、我々に示すのである（P. 二三九）」という。心理学は、直接的な経験を、諸々の態度、生活経験の条件、或は記号として、とらえられるような一連の諸状態に還元するのだが、直接的な価値という点から、直接的な経験を描くということを狙ってはいない。それ故に、心理学的分析は、道德的判断が取扱う所の典型的な態度を見出し、その態度を抽象して、客観的に述べるのみである。その際、「どのような性格現象にも関連をもつような一般化された命題の可能性は、一定の傾向、習慣、或は性向相互の、規則的な連合或は調和を表現する心理学的分析の可能性にかかっているのである（P. 二四一）」。

心理学的分析は、何が目的であり、理想であるかを告げるものではないならば、科学的判断と論理的に同じとされる道德的、倫理的判断も、目的や理想を示すことはできないことになるであらう。何が最高善であるのか、何が規範であるのか、という問題こそは、従来の倫理学諸理論の主要問題であつたのだが、これらの問題は、どこにゆくのか、

か。発生的な観点に立つ科学、そして、そのような科学の諸結論を受容れ、科学の実験的な方法を人間の事柄すべてに拡大移入する企てを持つ所の、デュウイの哲学においては、すべての判断及び陳述の妥当性は、行為によってチェックし、テストされなければならない。だとすれば、これ迄、現実存在とは無関係に存在せねばならぬとされた、規範、価値といわれる不変的、固定的な絶対的なものは、そしてそれらについての理論は、傍らにやられるか、又は絶対的なと思われたものを発生的な観点から相対化されることによって、解消されてしまうであろう。

デュウイは、真、善、美等、存在論的に絶対的なものとしてきたものの現実的基盤を示す。それは、具体的な成果、相対的な完成を鑑賞すること appreciation であり、不確定な現実の状況が、客観的に安定し、完成される際、その終りの状況、完成が、特別な卓越性を持つという点にある（L. 一七七）。従って、真、善、美は、現実を獲得される終末の一般化された抽象名詞にすぎない。そして、これらは、真正な理想或は目論見と同様に、探究、行為、創造に関して価値をもつ。即ち、探究、行為等を指示し、制限し、指導する力、機能をもつ。それ故に、これらは、具体的な場で満足されるような、具体的条件及び操作の助言として、取扱われねばならない。換言すれば、一般化された道具として役立つことによって、これらの理想の意味が、証されることになる（L. 一七八）。

価値という語は、行為を方向づける際に、正当な權威をもつと思われるものならばどんなものでも指すこととなる（Q. 二五六）。このような価値は、いうまでもなく、究極のものでも、それ自体で、固定的に存在するものでもなく、他の諸々の観念と同じく、行為を指導すべき器具である。従って、価値を、知性によって方向づけられた活動の成果である善と、同一視するのが、実験的観念論の定式であり、この定式は、実践的な重要性という評価基準を示す唯一の理論である、と主張される（Q. 二八〇—一、二八六）。こうして、「経験的な観念理論」と「器具主義」とは、絶対的存在に関しては唯名論的に機能する。

然し、不変的、永遠的な實在、価値をすべて拋棄した哲学は、科学の下に立つことになるのではないだろうか。確かに、既に見てきたように、科学の方法を範型として、觀念の問題、実践・行為の問題が論ぜられてきた。一切の判断は、科学的判断も、道德的、倫理的判断も、共に実験的、操作的活動であり、論理的に同じであるとされた。道德的、倫理的判断をも知性的、合理的に規制しうる条件を求めて、倫理の科学 science of ethics, ethical science 乃至道德の科学 moral science を追求するデュウイにとって、科学的判断の連続性(P.二四四)と、経験の連続性(P.二四九)とは要請であつた。更にその根柢に、活動の連続性(L.二三)、人間生活の連続性(P.二四五)が、第一の要請としてあつた。それ故にこそ、哲学は、科学の条件の下で、換言すれば、現実的なものの知識の条件の下で、科学の諸結論と、諸々の可能性が企てられ、追求される場合の社会的、個人的行動様式との、兩者をつなぐ連絡の任をもつものといわれたのである(Q.三二)。

彼の「実践」、「行為」、「活動」の概念の外延が極めて大であり、一般に実践とは區別される理論的認識をも含むものでありえたのも、この連続性の原理に深くかかわっている。この連続性の原理は、探究の連続性(L.序文三)となり、探究の現実にある母体として、生物学的な操作と組織が、必要条件としてあげられ(L.二三)る時、デュウイの生物学的、物理学的科学と、その方法、成果に対する全面的信頼は露わである、といえるだろう。

こうして彼の前提には、近代の実験的な自然科学に対する楽天的信頼があるといえよう。然し、この実験的な自然科学の論理として自覺されているものは、単純に、主観対客観の思惟方式を意味するとはいえない。即ち、環境内存在、或は状況内存在としての主体と、状況との、相互作用を含んだ連続性——これは、共に自然であることとしても示され、そこに自然主義がいわれることになる(E.第一、第二章、二六一、二七二)。——を基礎におき、主客未分の不安定な直接的経験を、操作的活動によって、対象として構成し、状況の安定を目指す行為を経て、安定に至る円環

的、というよりは螺旋的發展の運動がとらえられている。この運動を、究極において「自然」としてとらえる点に、主体自身を含んだ状況を、更に対象化する視点があらわれている。従って、状況内存在も、心理学的、生物学的、社会学的分析によって、自己及び状況についての知識を獲得しつつ、安心して行為してゆく、と考ええたのである。この視点故に、デュウイは、教育問題、社会改造の問題を安じて取扱いたのである。彼の自然主義が、人間中心主義が、又、実験的或は真正な観念論が、いわれる際にも、実験的自然科学への信頼、それ故の、操作の実践を通して、一切を相対的な有効性に関して、規制しようという、対象化的思维の立場と、状況内存在という意識との結合としての、この視点の形成こそ問題でなければならない、と思うのである。

このような視点に関しては、マルクス主義についてもいえる。それは、デュウイにおいて理論（科学的認識）の論理的構造をとらえ直すことによって、これを実践と原則的に同じ論理的構造であるとし、理論と実践の同一が主張されるのと、マルクス主義において理論と実践との統一がいわれるのとを照合させてみる時、又更に、デュウイが自らの哲学的思索を如何に進めていったかを、フォイヤールの論文⁽¹⁾によってみる時、益々首肯しうるものとなるであろう。人間の事柄、倫理の問題に、同じような視点の下に迫ろうとするものに、更にフロイト主義をあげることができる。⁽²⁾そしてこれらの諸思想は、その存在論において異なるものを含むにも拘らず、少くとも、倫理の問題に関しては、現代において、一つの典型的な視点をもっていると思われるのである。

〔註〕(1)「思想」四四〇、四四五号（六一年二月、七月号）「J・デュウイとアメリカ思想におけるヴ・ナロード運動」

(2) E. Fromm, Man for Himself, 1950, 56, 60.